

ラマラの主要なモスク
かつては十字軍により建てられた教会であった

新連載： 「イスラエル建国史」

1 はじめに
ユダヤ・中東研究家 滝川義人

1966年にノーベル文学賞を受賞したイスラエルの文学者アグノン（シュムエル・ヨセフ1888-1970）は、式典の受賞スピーチで、「ローマ皇帝のエルサレム破壊という歴史上の災難のため…私はディアスポラ（離散の地）の一都市に生まれました。しかしエルサレムは私にはゆかりの地であり、いつも私は、その地に生まれた者として自分を認識しているのです」と語った。自分のルーツ、言い換えれば自分のアイデンティティは、エルサレムにある、と言ったのである。

紀元70年以降の歴史

紀元70年エルサレムが陥落し、神殿を破壊された後、エレツ・イスラエル（イスラエルの地、パレスチナ）のユダヤ人社会は、バルコフバの反乱（132年）で一時エルサレムとジュディア（ユダヤ）地方を奪回した。しかしそれも束の間、反乱を鎮圧したローマは、この地をシリアパレスチナ、エル

十字軍により12世紀に
築かれたベルボアの
要塞跡



サレムをアエリア・カピトリナと改称した。

その後エレツ・イスラエルの外国支配が次のように続く。

1. ビザンチンの支配 (313-636)
2. アラブの支配 (636-1099)
3. 十字軍の支配 (1099-1291)
4. マムルーク朝の支配 (1291-1516)
5. オスマントルコの支配 (1516-1917)

紀元70年以降ユダヤ人社会は離散したが、エレツ・イスラエルからユダヤ人社会が一掃されたわけではない。ナボン家のように、スペイン追放でイベリア半島から、イタリア、サロニカ、イスタンブールあるいは北アフリカを経由して、やって来た人もいる。イスラエルの第5代大統領イツハク・ナボン（1921-）は、父方が代々380年もエルサレムに居住してきた家系である。その前をたどると、先祖が1492年スペイン追放でトルコへ逃れ、1670年にトルコからエルサレムへ来ている。

一方、離散が始まった1世紀後半、当地のユダヤ人社会は、アシュケロン、カイサリア、アッコ、ベトシアンが中心となった。

ガリラヤ湖岸の町ティベリアは、ヘロデの子ヘロデ・アンティパス（ガリラヤの大守）が紀元1世紀に建設し、ローマの第2代皇帝ティベリウスの名をつけたのである。紀元2世紀になってユダヤ人が本格的に住み始め、やがてここに自治機関の中核であるサンヘドリンが移設され、紀元400

年頃まとめられたエルサレムタルムードも、大部分がここで編纂された。ガリラヤ地方には、クハル・ナフム（カペナウム）、コラジン、バラムなど紀元3世紀頃から栄えた町がいくつもある。

ティベリアが十字軍に破壊されると、ガリラヤ湖北西のツファットに11世紀からユダヤ人が住み始め、ユダヤ教学の一中心地として成長していく。特に16世紀にヘブロンと共にユダヤ教神秘主義の中心地となり、カバラ研究が盛んであった。ユダヤ教法典として知られる「シュルハンアルフ」が、ヨセフ・カロ（1488-1575）によって編纂されたのも、ここツファットである。ちなみにカロは、スペイン追放でポルトガルに逃げた家の出身で、トルコのアドリアノーブルを経由して、エレツ・イスラエルへ来ている。

当地のユダヤ人社会の規模は時代の情勢によって変わるが、例えば1837年にガリラヤ地方を襲った地震で、ティベリアではユダヤ人1000名が死亡、ツファットでは死者5000名のうち4000名がユダヤ人であった。

民族や宗教集団の流入

エレツ・イスラエルは、支配者がいろいろと変わったように、民族や宗教集団がいくつも流入した。

コンスタンティヌス1世が313年にキリスト教の洗礼をうけ、その教を公認した

マムルーク朝により14世紀に建設
されたラムレの塔



ので、ビザンチン時代のエレット・イスラエルは、キリスト教徒が人口の大半を占めるようになった。草分けは、現在のギリシャ正教会で、ギリシャ語を言語とするキリスト教社会が2世紀前半に生まれている。

キリスト教社会のなかでアルメニア人の存在は特異である。現在はエルサレム旧市の一面にアルメニア人地区として残るだけになったが、紀元7世紀には聖地に72カ所の修道院を持っていた。636年8月20日、ビザンチン軍がアラブ軍とゴラン高原南のヤルムク川とルカッド川合流域で戦い、前者が敗北してビザンチン支配の終焉を迎えるが、その軍の主力はアルメニア兵であった。11世紀から14世紀にかけて、小アジア南東部にアルメニアのキリキア（シリシア）王国が栄えた頃は、巡礼を初め人の往来も頻繁であった。

8世紀以降人口の主力はアラブ人になる。十字軍はエルサレム・ラテン王国を建設したが、城塞都市で結び、人口のうえて面として広がらなかった。

しかし現在パレスチナアラブと一括される人々も、その構成は複雑である。ガリラヤ地方のクハル・カマトリハニアに居住するチェルケス族は、独自のチェルケス語を持つ少数民族である。出身地はコーカサス山脈の北西部。ロシアの南下に圧迫されバルカンへ逃れた。1880年にこの少数民族をパレスチナへ入植させたのが、トルコの**アブデュルハミッド2世**皇帝である。

ガリラヤ地方にはドルーズ族も住む。ドルーズ社会は11、12世紀から居住すると思われるが、13世紀以降ははっきりとした記録がある。皇帝はドルーズの入植にも熱心であった。

パレスチナアラブ人と総称される人々のなかには、このような少数民族も含まれる。さらに、近代特に英委任統治時代にシリアから流入した人々も多数いる。国連パレスチナ難民救済復興機関（UNRWA）が、パレスチナ難民を「1946年6月1日から1948年5月15日までの間パレスチナに居住し、1948年の第一次中東戦争の結果、住居と生活手段を失った人」と定義している通りである。この定義は、近年の流入を物語る。

ディアスポラ社会の発展

離散が始まった後、北アフリカ・中東にはモロッコ、チュニジア、エジプト、イラク、イラン等にユダヤ人社会があった。そのディアスポラ社会の中心地は、次のように変わっていった。

1. バビロニア（2-10世紀）
2. スペイン（10-15世紀）
3. ポーランド（16-19世紀）
4. 北アメリカ（19世紀後半）

16世紀には、ポーランドと共にオスマントルコ支配下のサロニカやコンスタンチノーブルにも、大きなユダヤ人社会があった。どこかの中心地が衰退してくると、それに代わる場所が大きくなっていく。各地のユダヤ人社会は、互いに連絡して生きていたが、イエメンだけは外部から遮断され、孤立した状態にあった。

寄留地のユダヤ人社会は、常に少数派であり、アイデンティティの危機に絶えずさらされた。平たくいえば同化の問題である。イスラム圏では、人頭税を払って生存を許されるズィンミー（被保護民）の地位にあり、キリスト教圏では環境が一段と厳しく、土地の所有を禁じられ、職業も制限された。迫害、追放と流浪もつきものである。例えばイギリス（1290）、フランス（1306、1322、1394）、スペイン（1492）、ポルトガル（1496-97）等々、ユダヤ人追放が続く。路頭に迷う人々はシオン帰還を願いながら、各地を流浪する。



芸術家ベノ・エルカンによるユダ・ハレビ像



シュムエル・ヨセフ・アグノン

スペインのヘブライ詩人ユダ・ハレビ（1075頃-1141頃）は、800ほどの詩を残している。そのうち350がディアスポラの生活をうたったもの、35がシオン賛歌である。当時スペインは、北部ではキリスト教徒軍がレコンキスタの事業を進め、南では後ウマイヤ朝が、北アフリカのライバルであるムラービトの挑戦をうけ、間にはさまったユダヤ人社会は逃げまどい、さらに聖地エルサレムでは十字軍の攻撃に苦しんでいた。

ハレビは、晩年になって移住を決意する。エジプトまでたどり着き、アレクサンドリアから船でガザへ行き、そこから聖地へのぼることにする。「激浪さかまくも、我が心天に舞い。主の聖なる神殿はすぐそこぞ」と詠じ、「聖地に対する無限の愛がわく」とうたったが、エジプトで病死したと伝えられる。ハレビの願いが現実のものになるには、800年余の歳月を要する。その間ユダヤ人は各地で迫害、虐殺を経験した。そして、帰還運動が可能になるためには、さまざまな外部条件がそろわなければならないかった。

しかし、独立してわずか18年後に、アグノンは、古代の民族言語でしかも日常会話用としては使われなくなっていたヘブライ語で、ノーベル文学賞を受けたのである。ルーツとしてのエルサレムだけではなく、アイデンティティのもうひとつの柱である宗教とヘブライ語文化が、内部でゆっくりと成熟していたのである。